ミニクロワッサン。

生野紫須多

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ミニクロワッサン。

【Ｎコード】
Ｎ８７２７Ｋ

【作者名】
生野紫須多

【あらすじ】
とあるパン屋を営む須藤家ファミリーのお話。
日常ラブピースストーリー？　ラブないかも。ちょっとした軽めのお話。全１７話の予定。
ある日、須藤家に謎の青年がやってきます。まぁ青年と少女の絡み。というか、ぶっちゃけ相合傘の話が書きたかっただけ。短編のつもりでした。

須藤美紀（前書き）

短編を書いたら短編じゃなくなってしまった話。
一本一本は短め。（長いのもあり）
最初の方は自己紹介なので、誰が誰だか覚えてて下さいな。

ほいっ、ミニクロワッサン一丁！

須藤美紀

† This is my memories of... †

By MIKI

私、須藤美紀。16歳の高校一年生。
簡単に言うなら、思春期真っ只中の純真無垢な女の子。……ごめん、やっぱなし。

家は自営店でパン屋をやってる。
私の生まれた時からそれは変わってない。
なんでも父さんの子供の頃からの夢だったらしく、母さんと結婚した時に二人で一緒に創めたそうだ。
近所の評判はまあまあ。客は多くはないけど少なくもない、と思う。
学校から帰ってくると売れ残ったパンが食べられるのは、正直ありがたかったりする。

最近、最悪最低なことがあった。

父さんが捨て犬ならぬ捨て人を拾ってきた……って言ったら信じる？
でも事実。アイツはここに居付いてる。居候とか、なに？　マジ信じらんない。

最悪なのはそのことで、最低なのはそれが親公認ってこと。

普通はない。そんなこと、ありえない。

アイツは男で、行き倒れてて、何処の誰とも知れない、そんな怪しいヤツなんだよ！？

……ずっと前に一度だけ、父さんが子犬を一匹拾ってきたことがある。

名前はチェリー。新しくやってきた家族に、私が可愛い名前をくれてやった。

それは良い。懐かしい思い出である。

だけどもオッサン。人は拾うなよ、人は……！

自分で言うのも何だけど、私は多感なお年頃なんじゃないのか？

そんな娘がいる家に、何で知らない男が居候することになるの？

おかしいだろ？　危ないだろ？　まさか私を愛していないのか？

父さんは一体何を考えてるの？　母さんも何故止めなかったの？

まだ9才の弟もいるんだよ？　あと、何でお前は行き倒れてる？

……止めとこう。なんか収集が着かなくなってきた。

とにかく！

私はまだまだ学生で、親の言う事には逆らえなくて。（逆らったけど）

こうなったらグレてやる！

とか、思ったり思わなかったりする今日この頃――――。

★

オッサンは嫌い。
母さんも同罪だ。
弟は普通にいい子。優しい姉でありたいと思う。
居候はいつか絞める。
チェリーは好きだからね。

★

今日も私はメランコリー。

朝起きて、顔を洗って、歯を磨いて、朝食にはパンを食べる。
両親は朝４時から店の準備を始めているらしい。
私には関係ない……ってか、そんな時間に起きるのは無理だ。
７時過ぎにベッドを離れて、残った時間は身支度に勤しむ。
最後に鏡を見てチェックして……うん、今日の私も決まってる……！

だけど私はメランコリック。

理由は山のようにある。だけど一番はアイツ。
居候の存在が重たい重石のように私の心に蓋をする。
アイツがいるせいで私の心はうまく開かない。たぶん、なんかそんな感じ。

今日も気だるい足音を立てながら、私は一階への階段を下る。

「美紀か、おはよー」
「お姉ちゃん、もう行くの？」

今日も今日とて、それは日常になりつつあった。
父さんと母さんは店の奥にいるのだろう。
昨日と同じように、私は立ち止まらずにそのまま進んでいく。

「何言ってんの、いつも通りでしょ？　じゃあね颯太、あんたも遅れないようにしなさいよ」
「「いってらっしゃ～い♪」」
「……んー」

何だかわからない音だけ発して。
鈴を鳴らして外に出る。
日差しは少し蒸し暑かった。

須藤美紀（後書き）

『次回はアイツ、アイツの話よ』

相坂ミケ（前書き）

あの小さい三日月、美味しいよね。

相坂ミケ

†　Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ｗｈｏ'ｓ　ｌｅｇｅｎｄ　ｏｆ．．．　†

Ｂｙ　ＭＩＫＥ

相坂ミケ。２１歳、独身、無職。名前をローマ字で書くとＭ．Ｉ．Ｋ．Ｅ。
マイクじゃないから、ミケだから。ここ、大事な所なんで覚えとこうな？

とりあえず、こんな素晴らしい名前をつけて下さった両親はもういない。
……嘘。一応生きてはいる。（今は知らない）
縁を切った……と言えば少しはマシだろうか？　実際は家出だったりする。
まぁ色々と深い理由はあるのだが、今さら思い返す事は何もない。
遠い日の思い出だ。

家を出てから紆余曲折を経て、今は須藤家にお世話になってる。
そこに至るまでを細かく話すと、全米が軽く涙してしまって大変なことになるので、今は省略。

初めに言っておくが、俺は須藤家の皆さんにはとても感謝している。
それは訳あって俺の命を救っていただいたからなのだが……実は後ろめたい理由もあるにはある。
少し誇張表現は混ざっているが、感謝してるのは本当。

……暫くは居候として生活していくつもりだけど、先の事なんてわからない。

☆

孝則さんには頭が上がらない。この人こそ、俺を救ってくれた人。
理沙さんにも絶対服従。孝則さんの奥さんね。
美紀は……仲良くはしたいんだけどね。今は難しいお年頃ってやつ。
颯太はすっげー懐いてくれた。嬉しい。
チェリーは好き。本当は犬より猫の方が好きなんだけど、そこは黙っとく。

☆

「起きなさい、ミケ」
「ぐおっ！？」

人妻に蹴り起こされる朝。……なんか、甘美だ。
なんて邪な煩悩を払いつつ、開ききらない瞼を擦って俺は起床する。

「おはよ」
「はよっす」

なんで俺が蹴られたのかは知らないが、理沙さんはこの家の頭首だ。
誰も逆えないので頭首。真の主でもいい。怖いので口には出さない。

きりっとした顔立ちに気の強そうな瞳。
髪は茶色がかったサイドポニー。
歳は３０代後半だと思うんだけど、見た目は２０代後半に見える。
だから、もしかしたら本当に若いかもしれない。（歳は教えてくれなかった）
魅惑のボイスに加えて、スタイルも中々な美人さん。これぞ須藤家クオリティ……！

「ほら、モタモタしない」
「ふぁ～い」

欠伸をしながら返事を返す。

俺の……というより、須藤家の朝は早い。
それはこの家がパン屋を営んでいるからだ。
準備とか準備とか準備とか、色々と大変なわけ。

顔を洗って、パパッと服を着て。
それから屋上に行って……あ、この家は3階立てだ。
一階がお店（パン屋）、2階が住居（ここで寝てる）、んで3階は……まだ良く知らない。俺には未知の領域。
屋上では愛犬のチェリーが鎖に繋がれて暴れまわってる。
俺はこいつに餌をやる係。で、今から餌をやるわけなのだが……。

「キャンキャンキャン」

また朝から五月蠅いくらいに迷惑な奴なんだ。
周りの家が苦情を言ってこないか心配である。
ちゃんと付近の皆さま方は安眠を約束されているんだろうな？

「オラ、大人しろ！　餌が食べたいんだろ？」
「クゥン……」
「まだだ、俺が合図するまでは絶対に動くな」
「……クゥン」

首を垂れて、ついでに耳も垂れる。
こいつはこの通り従順な奴でもある。
まぁ、それは俺が此処へ来てすぐの頃に調教してやったからだが……いや、少し上下関係をビシッとな？

とは言っても、今はそんな回想に浸っている暇はない。
チェリーに餌をやった後は、微かに残る眠気は無視して俺は一階への階段を下る。

「ミケ君、おはよう」
「おはよーっす！」

俺に挨拶してきたのは、すでに工房で仕事に掛っていた孝則さん。
この人がパン屋と須藤家を支える大黒柱。そして俺を拾ってくれた人でもある。
優しいマスクの裏には相応の年季と影が見え隠れしている、すげー渋いオジサンだ。
パンを作るのは意外に力作業が必要なのか、ガタイもいい。
顔は冴えないけど俺にはカッコ良く見える。これは俺の脳が勝手に補正してるせいかもしれんな。

挨拶を交わした後は、もちろん俺も手伝いに移る。
先に降りていた理沙さんと一緒に店の開店準備だ。

俺はほとんど雑用なのだが、素人なので仕方ない。
恩もあるので、力仕事くらいで助けとなるのならお安いご用である。

手伝い始めてから1時間半。
そろそろかしら、と言って理沙さんが持ち場を離れる。
彼女は母親と職人の二つの顔を持つ。そして母親の顔になったということは……。

「兄ちゃん、おはよー！」
「おう、はよー」

颯太が忙しなく降りてきた。今日も元気な声である。
腕白盛りの小学生。その顔は……あれ？　誰にも似てない……ぞ？

「じゃあよろしくね」

そう言って、悩む俺に颯太を任せる理沙さん。
彼女は一仕事終えた顔でまた仕事場へと戻って行く。

「今日は自分で起きれたか？」
「ううん、お母さんに起こしてもらった！」

お約束の言葉を交わして、颯太と戯れる。
この時間になると俺の仕事は一段落しているので、結構暇だ。
別に決められてはいないが、颯太が学校にいくまでの間は俺が相手をする感じになっていた。

「――――でね？　今日は彰と一緒に遊ぶんだ！」
「彰？」
「彰は僕の友達。学校のテストとかもいっつも１００点で偉いんだ」
「俺と同じだな」
「え？　兄ちゃんもなの！？」
「当然だろ。俺は１００点以外取ったことはないぞ」

思わず嘘を吐いてしまった。

「すっげーーー！　兄ちゃんすげーーー！！」
「おまえは人を疑うことを覚えた方がいいな」

――――タン、タン、タン。

そうこうしてる内に今度は美紀が下りてくる。
薄いブロンドに染め上げた長髪（染め過ぎだろ）がなびいて、少女の輪郭が色めいた。

「美紀か、おはよー」
「お姉ちゃん、もう行くの？」

今日も今日とて、それは日常になりつつあった。
孝則さんと理沙さんは奥で仕事中なので、代わりに俺達が見送る。
けれども、美紀の視線は俺の方へは向かず颯太だけに向けられて。

「何言ってんの、いつも通りでしょ？　じゃあね颯太、あんたも遅れないようにしなさいよ」
「「いってらっしゃ～い♪」」
「……んー」

猫みたいな唸り声を上げて、美紀が家を出ていった。

う～ん、と俺も唸りを上げてみる。
やっぱりまだ俺のことは避けてるご様子。
まあ、突然家に転がり込んできた見知らぬ男なのだから、仕方がないと言えばないのだが……。
そろそろここへ来て一週間が立つ。……これじゃあいけないよな。

「兄ちゃん、どうしたの？」
「……颯太、姉ちゃんは俺のことなんか言ってたりするか？」
俺は小学生相手にそんな質問を投げかける。半ば、本気だ。

「そういえば昨日なんか言ってた」
「なんて？」
「早く出て行ってくれないかなって」
「……さいですか」

嗚呼、子供ってホント無邪気だよなぁ。

相坂ミケ（後書き）

『次は颯太、やつは颯太、やっぱり颯太』

須藤颯太（前書き）

冒頭の英文は自信がありません。あってるかな？

須藤颯太

†　Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ｍｙ　ｄｉａｒｉｅｓ　ｏｆ．．．　†

Ｂｙ　ＳＯＵＴＡ

僕の名前は須藤颯太です。
小学校３年生でこの前９才になった。
もう自分の名前は漢字で書けるようになったと言ったら、すごいね
とお母さんがほめてくれた。

この前、家に知らない男の人がやってきた。
またお父さんが拾ってきたのよと、お母さんが言ってた。
チェリーもお父さんに拾われてきたらしい。
だけど、僕はその時のことを覚えてなかった。

兄ちゃんの名前は相坂ミケ。
名前がカタカナで珍しかった。あと、猫みたいな名前だなと思った。

最初は少し恐かったけど、しゃべってみると兄ちゃんはすごく面白
くて優しかった。
宿題も手伝ってもらって、いっぱい遊んだりしたら、兄ちゃんとは
すぐに仲良くなった。

今、兄ちゃんからゴシンジュツという必殺技を習ってる。
佳奈ちゃんは強い人が好きだと言ってたので、僕が強くなりたいと
言ったら兄ちゃんが教えてくれた。

佳奈ちゃんというのは僕と同じクラスの友達だ。
少し静かだけど笑顔がとってもかわいい女の子なんだ。
早く強くなって佳奈ちゃんには喜んでほしいので、がんばってゴシンジュツを覚えようと思います。

ちなみに、僕が特訓しているのは誰にも言ってません。秘密だからです。

◆

お父さんは好きです。
でもお母さんの方がもっと大好きです。
姉ちゃんも大好きです。
兄ちゃんも大好きです。
チェリーも大好きです。

◆

「颯太、起きなさい……颯太！」
「……むぁ」
今日もお母さんに起こされた。
「おはよ颯太。着替えはここにおいとくからね」
「おはよーございます」

朝はなんだか眠たい。
だけどちゃんと挨拶しないとお母さんは怒るのだ。
怒ったお母さんは恐いので僕はしっかり朝の挨拶をする。

「今日はどのパンにする？」

僕はチョコのパンを食べたい気分だった。

「チョコのやつ～」
「あ、それないわ。クリームのでいい？」
「やだ～！　チョコのやつがいい～！」

僕はチョコのパンを食べたい気分だった。

「チョコないの。クリームのやつにしなさい」
「え～～～！　じゃあいらない！」
「……あ？」
「やっぱり食べる」

僕はクリームのパンでもいいかな、と思った。

「颯太は好き嫌いがなくていい子ねぇ♪」

お母さんに頭を撫でられた。
お母さん匂いがして気持ちいいので、クリームのパンもおいしく食べられた。

よぉし、今日もこれから兄ちゃんとお話しよう！

「じゃあ兄ちゃんの所行ってくるー！」

「ちゃんと学校にいく用意したー？」

「したー！」

僕は勢い良く兄ちゃんのいる一階へと走っていった。

須藤颯太（後書き）

『今度はお父さん！』

須藤孝則（前書き）

主人公は美紀とミケ

須藤孝則

†　Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ｍｙ　ｌｉｆｅ　ｏｆ．．．　†

ＢｙＴＡＫＡＮＯＲＩ

須藤孝則と言います。今年で４５……あ、６だったかな？
家内と一緒にしがないパン屋なんかを経営しております。
パン屋は私の子供の頃の夢でしたからね。はい、今はとても充実しております。

突然ですが、須藤家の家族は５人います。
私（孝則）と家内（理沙さん）、長女（美紀）に長男（颯太）、それに愛犬（チェリー）。
そして最近もう一人、相坂ミケという青年（居候）が加わることになりました。

それはある雨の日の事。
私が何気なく近づいた窓の外から、奇妙な鳴き声が聴こえて来たのが始まりです。

とても苦しそうな声だったんですよ。う～んとか、ぁあああとか。
だから居ても立っても居られなくなって、その声の主を捜しに行きました。
すると、家の傍に人が倒れていたんです。いやぁ、驚きましたよ。
何しろ凄い雨や風の中だったものですから、ひょっとして死んでい

るのではないかとも思ったり……声が途中で聴こえなくなりましたから。

まあ、それがミケ君だったという訳なんですけどね。
当然見捨てることも出来ず、私は急いで彼を家まで連れ帰って介抱したのですが。
事情を聞くとどうも家出してきたらしく、行く当てもないようで。
それなら、と……まあ、はい。
あ、それと実は私が聞いた声というのは彼の腹の虫だったようで、パンを上げると泣きながらお礼を言ってくれました。

あと、本音を言うと理沙さんはこの件に反対してくると思っていたのですが……。
彼女は嫌な顔一つせず賛成してくれました。その時はもう本当に後光が見えましたよ。

まあ当然、娘には大反対されましたがね。
かと言って彼にはやっぱり駄目だ、なんて言えませんし……。
おかげで娘が反抗期に入ってしまいました……。
なんとか颯太は受け入れてくれましたが……いえ、もう過ぎたことです。

◇

理沙さんを愛して止みません。
颯太も大変愛しております。
美紀も大変愛しております。
ミケ君も好きですよ。うん、助けて良かった。

チェリーは……好きなんですけどね。なんだか僕は嫌われているみたいなんです。

◇

時間は昼頃。
今日もパン屋は忙しくなる。
あと夕方頃もお客さんが多くなるが、彼らは基本売れ残り狙いのゲスト達だ。
よって、この時間帯のお客さんの確保がお店を営業していくに当たっての肝となる。

――チリンチリン。

「いらっしゃいませー」
「いらっしゃーあせー」

扉につけられた鈴が鳴るのはお客さん来訪のお報せ。
接客の声は二つ、理沙さんとミケ君だ。
私は店の奥でパンを焼きながら店内の様子を耳で探る。
店の構造上、向こうからは此方の音は聴こえないが、此方からは店内の音が良く聴こえるようになっている。

「オススメですか。ふむ、これなんかどうでしょう？」
「えと……それじゃあそれを６つ下さいっ」
「あざーす♪」

耳を澄ますと若い女性の声と若い男性の声が頻繁に聴こえる。

「ミケ、こちらのお客さんにも」
「はいはいはいー」
「返事は一回で宜しい」
「はーい」

ふむふむ、今日も飛ばしているねミケ君。
少しにやつきながら、私はそんなことを思う。

ミケ君が家に来て嬉しい誤算があった。
パンを買いに来るお客さんは、やはり女性客の方が断然多い。
前からそれは変わらなかったのだが、ミケ君が来てからさらに女性客が多くなったようなのである。

「まあ当然よね。ミケって美形だもの」

理沙さんはそう言って、店の儲けがどうのこうのと盛り上がっていた。
私の焼いたパンが目当てなのでなくて、ミケ君が目当てということに関しては、私としても思う所はあるのだが……。

まあ、嬉しいことに違いはない。
新しいお客さんにも是非私の焼いたパンの虜になってもらいたいものである。

「んーーー、降ってきそうねぇ」

多忙だったお昼を過ぎて、今は3時のおやつ時。
客足も疎らになって、暇だからと店の外を掃除し終えた理沙さんがそんな事を呟いた。

「雨っすか？　天気予報じゃ今日は晴天でしたよ？」
「そうだけど、でも空気が温いし、少し雲も出てきたし」

これは彼女の特技の一つだ。（全部で何個かは教えてくれない）
何故だか知らないが、理沙さんの天気予報は的中率１００パーセントを誇る。
本当だ。今まで何度その予報に救われたかわからない。
そういえばここ数年、コンビニの傘を買った覚えもない……いや、それは基本店の中にいるからか。

「確か前もそんな事言って、マジで降ってきましたよね？　何でわかるんすか？」
「逆に問うけど、なんでわからないの？」

質問に質問で返しちゃいけないよ、理沙さん。

「基本的な命題はその真とする事柄が成り立たない場合その対偶もまた存在基盤を失い」
「うっさいわよ」
「……聞いたのは理沙さんですよね？」
「なんか言った？」
「いえ、なにも！」

……私も少し暇だし、向こうへ行ってみようか。

そう思って店の奥から店内へと向かう。
ミケ君が家に来てから、店内が前よりも賑やかになった。
私も良く持ち場を離れるようになったと思う。こうゆう変化が一番好ましい。

「あら、あなた聞いてた？　ミケが私の肩を揉んでくれるって」
「なんで？！」

きっとこの青年は私達……いや、須藤家にもっと良い変化を与えてくれる。

「まあ、その辺で勘弁してやりなさい」

不思議と私はそんな風に感じていた。

「え～なに？　あなたはミケの味方なの？」
「孝則さん。肩凝ってませんか？」
「いや、いいから……ああ、それで理沙さん、子供達は大丈夫なのかい？」
「あ、そうね。困ってるかも」
「それは大変だ、なんなら俺がやっときましょうか？」
「いいのかい？」
「なに、二人分の肩揉みくらい俺に任せてくださいよ」
「……」

たぶんね。

須藤孝則（後書き）

『次話は家内の話です』

須藤理沙（前書き）

チェリーはありません

須藤理沙

† This is my lover of・・・ †

By RISA

須藤理沙、近所で美人と評判らしい2児の母親です。年はヒ?ミ?ツ?
旦那と一緒にパン屋をやってる。作るのは専ら旦那。私も一応作れるけどね。

昔、旦那が捨て犬を拾ってきたことがある。丁度颯太が立ち始めた頃だったかな?
土砂降りの雨の中、犬の鳴き声がすると言って家を飛び出していったのだ。
旦那はびしょ濡れになって帰って来た。その胸では小さなワンコが泣いてたっけ……。

あの時の旦那は凄いカッコ良かったぜ。あれぞ水も滴るいい男だね。
そういうひたむきな姿に私も心打たれたわけ……っと、まあそんなことがあったのね?

子犬の名前はチェリー。娘が付けた名前だ。
『なんでチェリーなの?』と聞くと『だってチェリーがいいって言ったんだもん』なんて返事が返ってきた。
愛くるしく子犬とじゃれる娘は、それはもうとても可愛かった。
その時のやり取りとか、未だにけっこー覚えてる。なんかすっごい懐かしいな。

まぁ、それから数年経って、今度は嵐の日だ。
妙な鳴き声がするとか言って、また旦那が家を飛び出したわけ。
でも外は台風が来ててすっごい雨風なの。
それで大丈夫かなって、心配してたら帰ってきた。
びしょ濡れになったまま人を背負ってて、『パンをくれ！』だってさ。

さすがに私もびっくりしたんだけど、そこはほら、あの人のことだから。
そういうのを見ると放って置けない性格なのは知ってるし、仕方ないといえば仕方ないのかも。

あえて理由をつけるなら、あの人の人を見る目は確かだってこと。
攫われたり、拾ったり、巻き込まれたり……とにかく色んな面倒事を背負いこむのだけれど、なんでか旦那が関るのって不思議といい人達ばかりなのよね。
かくいう私もその一人だったりする。
結婚してからはそうゆうのも少なくなってきてたんだけどね。

そしてその例には漏れず、旦那が拾ってきたのは義理がたい青年だった。
家出してるから家には帰れない。帰るつもりもない。
しかし、この御恩は一生忘れません……とか、丁寧に土下座までしてくれた。
案の定、旦那もそのまま放りだすことはせずに、『それなら、家の手伝いをしてみないか？』とダメ押しの一手。
そうなるだろうなと予想はしてた。
でも私が反対すれば、旦那も聞いてくれたと思う。……しなかったけどね？

その日から家に居候が住みついた。
名前は相坂ミケ。私は彼をミケと呼ぶことにする。
普段は髪ボサボサでわかり難いけど、素材はいい。着飾ればテレビにも出られるんじゃないかと思う。
旦那なんか足元にも及ばないくらいのイケメンだ。
美紀が惚れちゃうのでは、とか内心ワクワクしてるのは私だけ？

●

旦那は……まあ言うまでもないっしょ。あ、最近太った？
美紀は絶対将来美人になる！　だって私に似てるもの……なによ、本当だってばっ！
颯太はやっぱり男の子ね。友達やミケとずっと遊んでる。もう元気過ぎるの何のって。
ミケはついつい弄りたくなってくる。でも彼の両親は心配してると思うのよね……。
チェリーは……小さい頃は可愛かったんだけど。大きいのは苦手なのよ。ごめんね？
勿論、みんな大好きよ？

●

「よし、いいわよミケ！」

想像以上かもしれない。
隠れた逸材を見つけて、私は少し興奮する。

「……これが、俺か……？」
「うふふ、びっくりした？」

ミケが鏡に映った自分の姿を見て戸惑う。
してやったりな笑みを浮かべる私、旦那も横で驚いた顔をしていた。

「……凄いな。正直、ここまでとは思ってなかったよ」

キリッとした眉、二重の瞼の形の良い眼、整った顔立ちを引き立たせるオールバックの黒い髪。

「成程、どこからどう見ても俺だ」

目の前には、どこからどう見ても凛とした美青年が存在していた。

「ふふん、普段の2割増し、と言ったところか」
「5割増し」
「普段の5割増しと言ったところかー」
「なんで棒読みなの？」
「ふ、普段の5割増し、と言ったところか……！」
「よろしい♪」

実際に手を加えたのは眉毛と髪の毛だけ。（少し髭も剃った）
それでも素材が良ければここまで変わるものなのだ。
と、私は満足した気持ちでミケを眺める。……これが須藤家クオリテー！

「しかし、傘を持っていくだけだろう？　ここまでする必要はあったのかな？」

とは旦那の一声。事の始まりも旦那の一言だった。
雨が降りそうなのに子供達は傘を学校へ持って行ってない。
なので、本人の希望によりミケに届けてもらうことにした。

「あるわよ。ミケはこの家の店員なんだから、外に行くにはそれなりの格好をしてもらわないと」

それじゃあ、と私は兼ねてから遂行したかったミケ改造作戦を実行。
美形なのはわかってたから、勿体ないなぁとつくづく思っていたのだ。
旦那のスーツを借りて、専用のハサミで眉を整えて、ワックスで髪をセットして。
そして出来上がったのはスーパーミケ！　これはただのミケじゃない。スーパーなミケである……！

「これであなたも立派なホストね」
「いや、執事の方が似合うんじゃないか？」
「そんなに褒めないで」

まあ実際は完全な趣味（出来心）であるが、旦那も良い拾いものをしてくれたものだ。
美紀はもう嫌がってしてくれないし、颯太にはまだ早過ぎるし。
丁度いい暇つぶしになる、反抗しない新しいおもちゃが出来て良かったわ！

「さすがは理沙さん、美容師を目指していただけはあるなぁ」
「あっ」

「え？」

ちょっ、待った！？

「あ、あなた、何でそんなこと言うのよっ？！」

「理沙さんが、美容師……？」

ば、ばれてしまったっ！

「ああ、悪い、つい……」

「理沙さんが、美容師……？」

ミケうるさい。だまれ。

「あれは……そう、若気の至りってやつよ。今となっては忘れ去られた忌々しい過去なわけ、わかってるでしょ？」

「あ、ああ」

「今じゃただの趣味程度なんだからね？　ほんっとに、それだけだから」

「わ、わかったよ」

ああ、もう。昔の自分をぶん殴ってやりたいわ。

こんなに恥ずかしい過去を暴露させられて、私はどうしたらいいの？

まったく、私は何で美容師になろうとしたのかしらね……。

「理沙さんが、び」

「あ？」

「び……び……」

「あん？」

「敏腕の弁護士になりたかったんですね？」

「ああんっ！？」
「ひぃ？！　すいませんっ！！」
ちっ、怯える顔も無駄にイケメンになりやがって……。
「あ、そういえば理沙さん、雨は何時頃降ってくるのかなぁ？」
旦那、わざとらしい真似するな。
そして私も早く口調を元に戻さないと……。
「ん～～～、この分だとたぶん四時過ぎかしらねぇ」
「それじゃ行ってきます！」
「あ、行くならパン屋の宣伝もお願いね～」
「あいあいさーーー！！！」

ミケが傘を持って怒涛の勢いで駆けていった。
何をそんなに慌てているのか、別に急がなくても十分間に合うのに。
あ、でも颯太はそろそろ帰ってくる時間帯だ。
しかも自分の傘を忘れて行ったな……まあいいか。

「ねぇ、あなた」
「さて、私もそろそろ工房に戻ろうかな」
「待ちなさい」
「と、トイレにっ」
「逃がさないわよ♪」

旦那にはちょっと言いたい事がある。
ので、私は旦那の肩に手を置いて一緒に工房に戻って行った。

須藤理沙（後書き）

『自己紹介は私で終わりよ。後はミケと美紀のターン』

小学校で　～ミケ～（前書き）

ミケのターン

小学校で　～ミケ～

“ＭＩＮＩ－ＣＲＯＩＳＳＡＮＴ”

それがこの店の名前。
孝則さんの、延いては須藤家の宝。
オススメは勿論ミニクロワッサン。みんな、よろしくな！

……こんな感じか？

なんて宣伝のセリフを考えながら俺ことミケは道を往く。
目的地である颯太の通っている小学校はすぐそこだ。
家から歩いて５分とかからない場所に、その建造物は俺を待ち構えていた。

人気のない小さな公園を通り過ぎて家々の隙間を潜り抜けた後、木々が等間隔で立ち並ぶ歩道をひたすら往けば、右手方面に見えてくるのが小学校。
緑の繁茂に浸食されたその錆びれたフェンス。
そんな物寂しい囲いにも、しかし様々な思い出が詰まっていることだろう。
そうやってフェンス越しから感慨深気に見た校舎の時計は、現在時刻が午後３時３０分であることを示していた。

……４時頃だっけ、雨降るの。

理沙さんから遠ざかるためとはいえ、少々早く来すぎたようだ。
いや、しかし胸倉を掴まれたからな……あれはマジで怖かった。

そうぼやく俺の傍には、すれ違ってゆく小学生の子供たちの姿が……って、おい！

「ちょっとそこの小学生」

これはまずい、と知らない小学生の一団を呼び止める。

「え、俺！？　お前だって！？　ダメ、お前が言え……いや、無理だって！？」

見た感じ高学年の仲の良い男子グループ。

だが俺が話かけたことにより内輪に不和が生じているようだ。

「少しいいか？」

「え……あ、な、なんですかっ？」

仲間の内のヒエラルキーに弾きだされた不幸な少年は、とても緊張している。

ふっふっふ。まぁ、こんなスーツ姿のハンサム美男子（自称ではない！）に声を掛けられたのだ。それが当然の反応というものだろう。

「君たちは何年生？」

「えーあー……5年……です」

「ほう。なら3年生の子はみんなもう下校してるのか？」

「えと、はい。たぶん、そうだと……思います」

ぬぬ、入れ違いになっていたか。

「……貴様、名は？」

なんとなく、すごみを効かせる。

「……か、かかかか」

ははは、ビビってるビビってる。

「かか、景山……鷹史、です」

「鷹史君」

「は、はいっ」

「もう行ってもいいが、絶対に振り返るな。わかったな？」

「はいっ！」

そそくさと立ち去っていく鷹史。

因みに彼の仲間は少し離れた所でこちらを窺っている。

「おい、鷹史」

「えっ「振り返るなっ！」」

「ははは、はい！」

と、俺が険しげに気弱な少年を送りだした時であった。

「あっ！　兄ちゃんだー！」

「ん？」

颯太の元気な声が辺りに響いた。

「何でそんな頭してるの？　何でそんな格好してるの？　何でここにいるの？」

俺は放課後になってもいまだにテンションが衰えていない颯太を仲

間に加えた。
「おお、良かった。お前に用があって会いに来たんだよ」
「え、何？　僕に？」
見ると颯太の後ろには友達と思われる少年少女たちがいる。
「後ろの子はお前の友達か？」
「うん、彰と信二くんと亜美ちゃんと佳奈ちゃんだよ」
覚えるのは面倒なので順にＡＢＣＤとする。
「颯太の兄のミケだ。よろしくな」
「……」
あ、挨拶したのに反応が薄い。これがイケメンの苦労か……。
「ねえ、兄ちゃん。用ってなに？」
「いや、実は理沙さんから雨が降るとのお達しがあってな。お前に傘を渡しに来たんだが……あんまり意味なかったな」
「え？　雨降るの？」
「そうらしい」
しかしお前達は雨が降る前に家に帰れる。つまり傘は要らなかった。ここまで来るのはとんだ無駄足だったというわけだ……わかってたよな、理沙さん。
「彰、どうする？　雨降るんだって」
「ホントか？　晴れてるのに？」

少年たちの雑談タイム。
どうやらこの後、二人で秘密基地で遊ぶ約束をしていたらしい。
どうする？　やめる？　家で遊べばいいじゃん？　など熱い議論が交わされる。

「……ん？」

俺はその熱い議論を静かに見守っていたのだが、ふと視線を感じて顔を上げる。
見ると残された颯太の友人B、C、Dの面々から熱い視線を注がれているではないか……！
おいおい、そんなに気になるのか？
ならば、この超絶ハンサムの魅力を惜しみなく堪能するがいい！

――――ニコッ（俺は0円の爽やかスマイルを投げかけた）

Bは顔をそむけた。
Cは落ちた。
Dは落ちた。

男も女も顔を真っ赤にして俺の視線から逃れる。
男はどうでもいい……寧ろ遠慮願いたいが、女子生徒はもう俺の魅力にメロメロなようだ。
なんてこった、俺は今までこんな才能を気付かずに持て余していたというのか……。

「兄ちゃん兄ちゃん」
「何だ、弟よ」
「彰の家で遊ぶことにしたから傘貸して！」

そのまま遊びにいくつもりなのか？

「皆も彰の家だったら近いし遊べる？」

「うん、大丈夫」

「亜美も大丈夫だよ」

「……わ、私も」

やはり子供はバイタリティが違うな。

雨が降るってのにこれから遊ぶとは。

……まぁいい、これでまずは一つ片付いた。

「それじゃあ、みんな気をつけて帰るように。遊ぶのなら傘を忘れるなよ」

「「「うん」」」

「あと、ミニクロワッサンも忘れずにな」

最後にお店の宣伝を忘れずに颯爽とこの場を後にする。

さて、これから俺は美紀の所へ行かねばならないのだが……。

雨が降る前に着ければいいが、ここから美紀の通う高校へは歩いて２０分はかかる。

チラリと垣間見たバカデカイ時計の長針は、今にも１０の数字へと差しかかろうとしていて。

……、……。

「あ、間に合わねー」

小学校で　～ミケ～（後書き）

『だが走らん。俺は歩いて美紀の高校へ向かう』

高校で　～美紀～（前書き）

美紀のターン

高校で　～美紀～

雨が降っている。
ただの夕立ちや通り雨じゃない。
窓の外に見えるそれは、長く燻ぶるための雨特有の匂いを、確かに偲ばせていた。

「さいあくぷー」

前席に座った遙が頬を膨らませながら愚痴を募らせている。
教室の一番端。窓際の一番後ろの席で、私は机に突っ伏しながらその不満の実態をただ眺めていた。

突然の土砂降り。それは地球環境を破壊してゆく私達に対する制裁だ。
誰も彼もが予定を狂わされて、大自然の脅威に晒される。……私達には為す術もない。

教室には帰路を断たれた有象無象（クラスメイトたち）が犇（ひし）めいていた。
外の部活は中止されたし、これから帰ろうとしていた帰宅部の連中――私もその一員である――も教室から動けないでいる。
中にはこの豪雨を物ともせずに帰宅に勤しむ強者（つわもの）の姿も見かけるが、それもごく少数に過ぎない。
空から降り注ぐ雨粒はやがて地を埋め尽くし、さらなる災害をこの地にもたらすだろう。

「これじゃあ家に帰れないよー」
「いいじゃない、帰らなくても」

私はどちらでも良かった。
家に帰っても、帰らなくても、私の気分は変わらないから。
もし雨が止まなければビショ濡れになることになるが、それも悪くはない気分だった。

「なんでー？　みっちゃんは雨が好きなのー？」
「雨？　雨は好きよ。だって雨は地球が流す最後の涙なのよ？　そこには色んなモノが詰まっているの、だからきっと、寂しい事も嬉しい事も、全てを綺麗に洗い流してくれるのよ」
「みっちゃん、みっちゃんが変になったー！？」

ダウナーな気分の時は、とても詩的な思いが溢れてくる。
それはこの雨のせいなのかもしれないし、違う誰かさんのせいなのかもしれない。

些細な事に気付かされる。
雨のしなる音や教室のざわめき。
流れゆく意識にそっと耳を澄ませば――――。

「ぴーちぴーち、ぱーくぱく♪」

――――なんでもない。

「そうか、遙も変だったか」
「私は～変じゃ～ありませ～ん～♪」
「じゃあ私は変なの？」
「みっちゃんも～変じゃ～ありませ～ん～♪」

奇なる歌声を響かせる目の前の少女に、私は思わず和んでしまう。

「ぷるるるる～ぷらららら～♪」
「あ、携帯の返事きた？」

遙が家に連絡を入れていたのを思い出した。
どうやら彼女は親に車で迎えにきてもらうらしい。
それは関係ないかもしれないが、実はこう見えて遙の家はお金持ちだったりする。
かくゆう私も、そのお相伴（しょうばん）に与（あずか）ろうという魂胆なのだった。

「ま～だ～で～す～よ～♪」
「そ～う～で～す～か～♪」

一緒になってふざけてみると、意外に楽しかった。

「あっ！　みっちゃん、見てアレー！」
「やめんのかよ」

私がこんなことをするのは年に一度あるかないかだぞ？

「ほら、アレ、みっちゃんのと同じ傘じゃない？」

はァ？　と思って最上階の窓から下界を眺める。
すると確かに見下ろした先（校門の近く）には自分の物と同じ、花柄のピンク色の傘が大きく開花していた。

「あ、ほんとだ。私のとそっくり」
「でしょー。すごい偶然だねー！」
「……偶然？」

そうは思えなかった。
あの傘はただの花柄ピンクな傘じゃない。
デザインは結構奇抜で、そんじょそこらではお目にかかれない代物だった。

なんたってアレは、外国産の傘である。中華やハンバーガーの国じゃない。
両親がシンガポールに新婚旅行に行った時に買ったものである。（らしい）
三年程前、家の押し入れの中で埃に塗れていた所を私が発掘したものだ。
それ以来私が使う事になったのだが、それと全く同じ傘が今ここにあるというのか？

それはおかしい。

確かに私は偉いかバカかと言われれば、間違いなくバカな部類に入るだろう。
そんなバカな私でも、それなりに判ることもある。だから――――。

だから、もう一度聞く。

――――これは本当に偶然なのか？

私でない誰かが、シンガポールに行って、たまたま同じ傘を買って、
そいつが私と同じ高校に通っている？
もしくはたまたま同じ傘が日本に、それもこの近くで売られている？

否、そんな事はない……はずだ。

だとしたら？

「……まさか」

「あ、みっちゃん！？　待ってよ～！」

私はかばんを持って教室を飛び出した。
そのまま2段飛ばしで階段を下る。
４階から1階へ、すれ違う生徒には脇目も振らず。
携帯を家に忘れたのが痛かった。
どうして今日に限って置いてきてしまったのか。
自らの失敗が悔やまれる。嫌な予感が脳裏に爆ぜた。

「はぁ、はぁ、はぁ」

息を切らせながら下駄箱に辿り着いて、急いで靴に履き替える。
その後、雨が止むのを待っている他の生徒達に混ざって、私は玄関のホールから一歩だけ前に踏み出した。
そこから先は外（あちら）と内（こちら）の境界線。
降り続く水滴によって描かれた、明確なる世界の分かれ目。

「はぁ、はぁ、はぁ」

心臓は大量の血液を送り出していた。
けれども今は、そんなことは気にしていられない。
私は境界線の内側に佇むほんの一人の生徒となり。
楕円に沿ったホールの端で、その他大勢と同じように一点を見つめる。

「……あ」

最初はそうだと気付かなかった。
その“誰か”が近づいてくる度に、確信は大きくなる。
いつもとはかけ離れたその姿に、思いのほか私は戸惑っていた。

――――なんで。

母さんかもしれなかった。
父さんかもしれなかった。
可能性はたしかにあった。

――――あんたが。

どうゆうわけか黒いスーツに身を包んで。
どうゆうわけかオールバックに変わって。

そいつはたった一人、境界線の外側から。
内側の世界にいる私を見つけて、小さく微笑む。
そして、周囲に潜む好奇の目などまるで気にする様子もなく――――。

「――――お迎えに上がりました、お譲様」

私の前に立って、そう言い放ってくれたのだった。

高校で　～美紀～（後書き）

『……（ドキドキドキ）』

高校で　～ミケ～（前書き）

ホストか執事の2択だったのです

高校で　～ミケ～

雨が降っている。
少しずつ、しかし段々と強まる雨足。
理沙さんの言っていた通り、そいつは４時過ぎ頃に幅を利かせ始めた。

降り出して、傘を差そうとして、気付く。
俺の傘がない。急いでいたので失念していた。
仕方なく俺は花柄ピンクの可愛らしい傘を広げて身を守った。

一旦自分の傘を取りに帰ろうと思い、次に考えを改める。

雨は降り続いていた。
その間、美紀に待たせてしまうのは忍びない。
さらにここで帰ったら、理沙さんに何を言われるかわからない。
最後に、金もない。
以上の理由から、俺は妙案を断念せざる得なかった。

そして俺が美紀が待っているだろう高校に辿り着いたのは４時１０分頃。
普通に部外者であるこの俺が、こうも自然に校内へと潜り込めたことに一端の不信感を覚えながらも、俺は下駄箱があるであろう（生徒達が立ち往生している）場所へ向かってゆっくりと歩を進める。

――――美紀は怒っている。

たぶん……いや、ここは最悪を期していこう。
作戦とは常に最悪の状況を想定して行われるべきだ。
何故ならそうなったときの心理的ダメージを極力、最小限に抑えたいからである。

とまぁ、その前に。

そもそもの話、俺が須藤家に居候する際に反対の意を示したのは美紀だけだ。
俺としても気持ちは解かる。俺が美紀の立場なら同じ様に猛反対しただろう。
よって美紀は俺に対して少なからず警戒心を抱いている。
しかしだからこそ俺は、そんな美紀の事を好ましく思っていたりもする。

だってあの家は少し警戒心が薄過ぎるのだ。
見ず知らずの行き倒れである俺を拾って、挙句そのまま引き取ってしまうなんて。
ひとつ間違えれば……例えば俺がその気になれば、須藤家はすぐにでも脆く崩れ去ってしまうだろう。

だからこそ、だ。

美紀が俺を疎(うと)ましく思っていることは、逆に俺にとっては喜ばしいものとなる。
美紀があの家の最後の良心だ。アイツが居なければ危なっかしくて見ていられない。
だから嫌われていることに安堵する……あれ？　これじゃ俺がマゾ

みたいじゃないか？

「違うぞ」

俺は一人虚空に向かって弁明する。

とりあえず話を戻そう。

美紀の……なんだっけ……ああ、怒っているからどうしようって話だ。

状況は最悪だ。

美紀は俺に警戒心を抱きまくっている。

なのに俺は美紀の傘を差して迎えに来てしまった。

さらには自分の傘を忘れてくるという体たらく。……もう一度言う、状況は最悪だ。

振り絞るなけなしの知力。

思い浮かぶのは強烈な言葉だった。

即ち、“相・合・傘”の三文字である……！

俺としては何ら問題はない。

美紀がどうでるかが問題だ。

果たして俺との相合傘を許可してくれるだろうか？

でなければ、俺は一体どうやって帰ればいいのか？

要するに、事態はすでに俺の手を離れていたのだ。

雨が降り出してから１０分間。

俺は答えのない問いを考え続けて高校を目指し。

そして玄関に佇んで此方を見つめている美紀の姿を確認した。
降り頻(しき)る雨のカーテン。きっとそれは境界線だ。
美紀は日常から、俺は非日常から。
互いを模(かたど)ったそれぞれの世界から、俺達は視線を交わす。
美紀が異分子である俺に対して警戒心を向けてくるのは。
俺が日常を守ろうとする美紀を好ましく感じているのは。
結局はどちらも、同じ想いに端を発しているのかもしれない――――。
――――そう思うと自然に笑みが零れた。
俺はそれを誤魔化すように、恭(うやうや)しく口上を述べる。
「お迎えに上がりました、お譲様」

高校で　～ミケ～（後書き）

『美紀が見つからなければ乗り込むつもりだったのだがな……』

校門前で　～美紀～（前書き）

折り返し

校門前で　～美紀～

「ちょっ？！」

突然の、予想だにしない居候の言葉に周りの空気が変わったのを感じた。
幾多もの好奇の視線が私にも降り注いでくる。同時に、顔が熱くなった。

「お待たせしてしまって申し訳ない。……しかしお譲様、少々問題が」
「――っ！？」

怒りも沸いたが、込み上げてきた羞恥心の方が強い。
妙な静寂が辺りを支配していた。雨の音がやけに小さく聴こえる。
周りの生徒達が無言で私に注目している所為だと思うのは、絶対に気のせいではないはずだ。

「実は……」
「みっちゃ～～～ん、どうしたのー？」

そこへ遙が追いついてくる。バカ、今私の名前を呼ぶんじゃないっ。

「来なさいっ！」

なんだか大事になりそうで恐くなってきた。
とにかく、何処でもいいので誰もいない所に場所を移さなくてはならない。

「いえ、その前に言わなければいけないことが……」
「いいから来いっ！」
「お、お譲様っ？！」
「黙れ！」

周りの目に急かされながら、私は早足でそいつを引っ張っていく。
遙にも着いてくるなと一蹴して、少し濡れるのは我慢して玄関から少し離れた階段下まで移動した。
外界へと直接繋がるコンクリ階段の裏側。
ここなら人目もないし雨も凌げる。声も向こうまでは聴こえまい。

「やめてよねっ！　あんた一体何がしたいわけっ？！」

すぐに不満の声が迸(ほとばし)った。

「お嬢様に傘を届けに参りました」
「まず、その変な口調をやめろ！」
「え……変だったか？」
「私をからかってるわけ！？　あんた私の学生生活を無茶苦茶にする気！？」
「いやいや、俺はただ執事になろうとだな……」
「は？　迷惑以外の何でもないでしょ！？　そんなこともわかんないの？　バカじゃないの？」
「気にするな。冗談だ」

スゲーむかつくな、おい。

「……で、何しに来たのよ」

腸(はらわた)は煮えくり返っていたが、なんとか抑える。
私がこいつに怒鳴ってもこの状況は好転しないと思ったからだ。
そっぽを向いた私は、降り頻る雨を眺めながら居候の返事を待つことにした。

「傘持って行ってなかっただろ？」
「ああ、そうゆうこと」

その一言で大体理解できた。
こいつの姿も、ここに来た理由も。
母さんの差し金に違いない……まったく、余計な事を。

「で、なんで私の傘差してんの？」
「……告白しよう。俺の傘はない」

バカか？　おまえは？

「雨が降ってきてから気付いたんだが、すぐ近くまで来ていたからな」
「コンビニがあったでしょ？　傘くらい買いなさいよっ」
「……買ってくれんの？」

バカだな、こいつは。

呆れながら手を開いて差し出す。

「ん！」
「ん？」
「傘っ」
「ああ」

悪いな、と苦笑いしながら傘を渡してくるそいつに私は無性に腹が立った。
何故が腹立つって、へらへら笑うその面が美形だったからだ。バカなのに。

「さて、ここで一つ聞きたいんだが……」

何、と短く返事を返す。
どうしてなのか、胸はまだウルサイくらいに高鳴っていた。

「俺の分の傘がない」
「？」
「ここから導き出される推論は何だ？」
「何、言ってんの？」

意味が分からないが真剣な顔だった。
私は思わず見とれそうになるのを、なんとか誤魔化そうとしていて。

「はぁ……おまえ、国語の成績悪いだろ」
「……」
「いや待て、今のは失言だった」
「ふん、今さらね」

不思議だ。
こうゆう性格なんだと思えば、怒りは沸いてこない。

「それで、さっきからあんたは何が言いたいわけ？」
「先に言っておくが、返事は『ＹＥＳ』か『はい』で頼む」
「……つっこまないわよ」

目を瞑って肩を竦(すく)める姿も様になっていた。

「そうか、なら相合傘をしても文句はないな？」

「……」

「……」

ザーッという雨音だけが空白を埋める。

「……今、何つった？」

「はい、つっこみ禁止」

とりあえず、殴ろうと思った。

校門前で　～美紀～（後書き）

『そういえばこいつの顔……ちゃんと見たことなかったかも』

帰り道で　～ミケ～（前書き）

すみません。口が悪いのは仕様です。

帰り道で　～ミケ～

「痛い」

先程、手痛い仕打ちを受けた。
こんなに凶暴な女に出会ったのは何年ぶりだろう。

「それはあんたが馬鹿だからでしょ」
「つっこまないと言ったじゃないか」
「うっさいわね、今から出てってもいいのよ？」
「良いパンチだった。おまえなら世界を狙える」
「なに？　死にたいの？」

強烈なボディーブロー（5発）だったが、相合傘の代償としては安いものだ。
おかげで今は、雨を凌ぎながら斜面を下り、こうして会話する余裕すら生まれている。
まぁ、これもそれも俺の巧みな話術と世界が羨む程のルックスがあってこそなのだが……。

「……」
「……？」

俺は美紀の顔を見つめる。

「……」
「……な、何よっ」

双眸は俺を射抜き、眉は吊り上がって、口元は真一文字に閉じている。
さすがは理沙さんの娘なだけはある。容姿はかなり整っていた。
迫力があるので睨まれるとけっこー怖い。胸倉を掴んできた理沙さんにそっくりだ。

「……」
「……ちょっと……なん……だよ」
すげーな、怒り過ぎて顔が真っ赤だ。

「……」
「も、もう見んなっ！」
「うごっ！？」

ドスっと、またもや腹を強打される。

「おい」
「あ、あんたが睨んでくるからでしょうが！」
「悲しい誤解だ。大体睨んでいたのはおまえの方……待て、振り被るな！」

牽制しつつ、お腹を擦りながら二人で肩を並べて歩く。
背は俺の方が高いから傘は俺が持っていた。故にガードが難しい。

……。

それにしても、やはり美紀は怒っているようだ。
何もしてないのに殴られたし、それはもはや疑いようのない事実だろう。

まさか俺の華麗なルックスが通用しないとは……さすがは美紀と言ったところか。（適当）
だがしかし、そう考えると今の状況は矛盾してないか？

「美紀」
「今度は何……っていうか、名前で呼ぶなっ」
「今さらだな。それに須藤って呼んだら誰が誰だか分からんだろう」
「あ、それもそうね」

今頃気付いたのか……やはり残念な子らしい。
そういえば颯太も勉強は苦手だったな。家系か？

「名前が嫌なら……そうだな、『みっちゃん』というのは――」

――ドス！

「せ、先生、凶暴過ぎます……」
「次言ったら殺すから」

く、毎度毎度同じ所に……これは確実に理沙さんの影響と思われる。

「じゃあ何て呼べばいいんだ？」
「仕方ないから美紀でいいわよ。仕方ないから」
「2回言う必要はなかったよな」
「それよりあんた、何か言いかけてなかった？」

……。

「今から変なこと聞いてもいいか？」
「……いいわよ。しばかれたいなら」

しばかれたくはないが、言う。
「何で相合傘してくれたんだ？」
「……」
どうして？　と不思議に思う。
「俺は嫌われてるはずだよな――――？」
――――だから、俺には判らない。
美紀が俺を嫌っているのは事実。
ならば相合傘をする理由がない。
優しいから？　いや、平気で殴ってくるのでそれはない。
今だからハッキリ言うが、俺は一人寂しく土砂降りの中帰路に着く自分を想像していたのだ。（ダメ元で言ってみたのだ！）
「それは、私との相合傘は願い下げってこと？」
「勝手な解釈をするな。単純に気になるだけだ」
俺は気になることはとことん追求するタイプの人間だからな。
「まぁ、無理に聞こうとは思わないが」
「……」
美紀は少しだけ俯いてから、前を向いてはっきりと喋り出す。
「確かに、あんたは嫌いよ」
「……え？」

「殴っていい？」
「すまん、続けてくれ」
世の中、わかっていてもショックなことは沢山ある。
「……ただ、あんたにびしょ濡れで家に帰って来られても困るってだけよ」
確かにそうだ。このスーツ孝則さんのだしな。
「それだけか？」
「そうよ、それだけ」
「本当に？」
「何よ、文句あんの？」
「ああ、納得できん」
そもそもだな……。
「納得しなくてもいいわよ。でも嘘なんて吐いてないし」
「本当のことも言ってないだろ？」
「……」
「……まぁいいか。そうゆうことにしておこう」
他人の心……ましてや女心など俺にはわからない。
まぁ、だから聞いたのだが……。
「なんか、その上から目線がむかつくわね」
「そうゆうな。俺は美紀のこと嫌いじゃないし」
色んな意味でな。

「なな、何言ってんのっ？！」
「勘違いするな、性格だぞ？」
「うっさい！」
「ごふっ」

痛い……すぐに手が出るのはどうにかしてほしいぜ。

「やっぱり撤回していいか？　手癖の悪い女は好かん」
「悪くさせてるのはあんたよ！」
「自覚があってそれか……もはや取り返しがつかんな」
「うっさいっ！　黙れっ！　もうしゃべんなっ！」

帰り道で　～ミケ～（後書き）

『これは余談だが、美紀のパンチは本当に鋭い』

帰り道で　～美紀～（前書き）

これが書きたかっただけ。最初はね。

帰り道で　～美紀～

最初は少し緊張していた。
今までほとんど話したこともなかったっていうのに。
そいつはまるで何事もなかったように話かけてくる。
避けていたのは私だけだった。
話そうとしてなかったのも私。

『美紀は俺のことが嫌いだよな？』

そいつは直接、私の心に斬り込んできた。

私は、居候のことが嫌い。

だって、今日も私は憂鬱だった。
昨日だって一昨日だって、私の心は雨模様。
それは居候が原因で、それは当り前の事で。

私も嫌われてると思ってた。
それが、当然だと思ってた。
だから、私は困惑していた。

『単純に気になるだけだ』

相合傘をした理由。

濡れて困るのは居候だけじゃない。
それから、ほんの少しだけど、可哀想だと思ったのもある。
だから仕方なく傘に入れて上げることにした……じゃないと、おかしい。

『……確かに、あんたは嫌いよ』

ならば一瞬、胸の奥に走ったあの痛みはなんだろう。
どうして、この胸は未だに高鳴ったままなんだろう。
いつの間に、憂鬱な気分はなくなっていたんだろう。

私には、理由がわからなかった。
わからないまま、私は雨の音を聞いて歩き続けていた。
隣には、何を言い出すのか予想がつかないバカがいた。

「そういえば美紀よ」
「あによ」

でも一つだけ。

「俺は誰だ？」
「はぁ？」

一つだけ、わかったことがある。

「頭おかしんじゃない？」
「実は偉い」
「……それが言いたかっただけ？」
「はぁ……もう一度だけ言うぞ。俺は誰だ？」
「偉そうに言うな」

「おまえの方が偉いなら、俺が何を言いたいのかが判るはずだ」
認めたくないけど。
「……記憶喪失？」
「昨日の晩飯はスパゲッティだったな。美味かった」
「ハンバーグよ」
「最後のチャンス。俺は誰だ？」
こいつのこと――――。
「……もしかして、名前で呼べってこと？」
「まぁ、広義的にはそんな意味も含まれる」
「バカ？」
「そう悲観的になるな」
「あんたのことよっ！」
バカで、偉そうで、かなりムカつくやつだけど。
「私はあんたのこと嫌いって言ったでしょ？」
「それでも名前くらい呼ぼうぜ」
「言う訳、ないでしょ」
自分勝手で、アホなことばっかり言うやつだけど。
「……なら明日も高校に行っていいか？」
「なっ！？　卑怯よっ！」
「明後日も行くとしよう」
「わ、わかったわよ！　言えばいいんでしょうが言えばっ！」
「嫌なら別にいいんだぞ？　強制してるわけじゃないからな」

「嘘つけっ！」

すごく、すっご～く性格の捻くれたやつなんだけど。

「い、言うわよ……」

「さて、須藤美紀さんの憧れの男性はだぶえっ！？」

「次やったら、殺す」

「……」（無言でコクコクと首を振る）

本当に、そうなんだけど。

「あ、相坂……」

「相坂？」

「ミ……」

「ミ？」

だけど。

「……ケ」

「……」

どうしてだろう？

「言ったわよ」

「言ってねぇよっ！？」

私は、こいつのこと――――そんなに嫌じゃないみたいだ。

少しだけ。

雨は弱くなっていた。

帰り道で　～美紀～（後書き）

『嫌いは嫌いよ』

須藤美紀の憂鬱（前書き）

中学の数学かもしんない……いや、小学校か？

須藤美紀の憂鬱

†　Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ｍｙ　ｍｅｍｏｒｉｅｓ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ｍ
ＩＮＩ－ＣＲＯＩＳＳＡＮＴ　†

Ｂｙ　ＭＩＫＩ

今日も私はメランコリー。

朝起きて、顔を洗って、歯を磨いて、朝食にはパンを食べる。
慣れ過ぎた惰性の時間も、特に気にせず淡々とこなしていって。
最後に鏡を見てチェックして……うん、今日の私も決まってる……！

だけど私はメランコリック。

理由は色々とあるのだけれど、一番の理由はあいつ。
居候の存在が澄み渡った私の心に負担をかける。
ミケがいるおかげで、私の心はキレイにならない。たぶん、なんかそんな感じ。

今日も気だるい足音を立てながら、私は一階への階段を下る。

「お姉ちゃんおはよー！」
「美紀おはよー」

今日も今日とて、それは日常になりつつあった。
私は扉の方へ向かっていた足を止めて向き直る。

自然とミケへ目が向いた。
そこにいるのは確かに昨日と同じ人物。
髪型が違うだけだっていうのに、随分と印象が変わるわね……って、何見てんだ私は。

「おはよ颯太。相変わらずあんたはテンション高いわね」
「テンションって何？」
「おはよ～」
「……今日も元気ねってことよ」
「テンションテンション！」
「おはよっ」

……。

「それじゃ、私は行くからね」
「うん、バイバーイ」
「……まさかの痴呆とは。可哀想に」
「聞こえてるわよっ」

一方的に怒鳴りつけて。
鈴を鳴らして店を出る。
今日もミケがうざかった。

「あ、みっちゃん！」
「おいっすー」

軽やかに挨拶を交わして席へと着席。

「みっちゃん」

「んー？」

荷物は手提げ鞄だけ。

教科書の類はいつも机の中に完備してあるので、忘れる心配はない。

入りきらない分は横に吊るしてある。勉強熱心な私にはこれくらい造作も無いことだ。

「あ、昨日ちゃんと帰れた？」

「帰れたよー。車なら楽ちん楽ちん」

「そう、良かったわね」

「良かったよー」

さて、勉強勉強。

「あのね、それで昨日のことなんだけどね？」

「えーっと、ｐ２２ｐ２２……あった」

「……みっちゃん、なにしてるの？」

「勉強」

まずは数学の教科書を開いて昨日のおさらい。

授業は半分寝ていたので、どうしてなかなか難しかった。

「それよりみっちゃん、昨日の」

「遙、気が散るから喋らないで」

「えーっ！？　ホントにどうしちゃったの！？　あれだけ勉強嫌いなみっちゃんが、みっちゃんが！」

「うっさいわよ」

新品同様の教科書を広げて、難解なアルファベットの公式を解読する。

「……」

「……ｙ＝２ｘの時、ｙ＝６ｘ＋４……？」

「……」

「ｙが２ｘなのに、６ｘって？　……＋４はただの飾りか？」

「みっちゃん、みっちゃぁぁぁぁん！」

「泣くな！　そしてうっさい！」

ダメだ、遙が煩いせいで、ちっとも勉強が捗（はかど）らない。

それでも何とか必死に頭を働かせるが、本をただ眺めるだけの時間が続いた。

……パタン。

「やめよ」

「みっちゃん、昨日の人誰？」

私が諦めた時、今までの苦労が水の泡となって弾けて消えた。

「……」

「すごいカッコよかったね」

「……」

「二人で一緒の傘に入ってたね」

「っ！？」

「彼氏？」

「んなわけないでしょっ」

聞いて欲しくないから誤魔化していたのに、空気を読めと言いたい。ミケといい遙といい、人のプライバシーというものを知らないに違いない。

「じゃあ、誰なの？」
「ぁ、あいつは……」
「あいつぅ？」
「……」

もうやだ。帰りたい。

――キーンコーンカーンコーン。

一時限目のチャイムが鳴ったところだった。

須藤美紀の憂鬱（後書き）

『なんか、朝から変な視線を受けるのよね……やな予感がする』

須藤颯太の驚愕（前書き）

颯太の髪は黒ですよ

須藤颯太の驚愕

† This is my diaries of the MI
NI－CROISSANT †

By SOUTA

「今日はどうだった？」
「お母さんに起こされたー！」

今日も兄ちゃんに同じことを聞かれて、僕はいつも通りの返事を返した。

「ダメだろ、ちゃん自分で起きれるようになれよ」
「え～だって～」

僕が起きる前にお母さんが起こすんだもん。
その気になれば僕は自分で起きられると思うんだ。

「だってじゃないだろ。おまえいくつだっけ？」
「9才！　来年で10才になるよ！」
「俺が9歳の頃なんかおまえ、家族の誰よりも早く起きてたぞ」
「すっげー！　それじゃあ今日も早かったの？」

兄ちゃんはホントにすごい。
頭も良いし、ケンカも強いし、それで誰よりも早く起きられるなんて凄すぎる。

僕なんかテストは１００点取れないし、この前何もないところで転んだし、いつもお母さんに起こしてもらうのに。

だから兄ちゃんは僕の憧れで、目標だ。

いつか兄ちゃんみたいなすごい大人になりたいと思う。

「ああ、今日も朝から蹴り入れられてマジで大変……」

「蹴り？」

「そういえば颯太はサッカー好きか？」

「好き！」

「俺は嫌いだ」

「そうなの！？」

「球技がどうもダメでな」

兄ちゃんにも苦手なものがあるらしい。驚きだ。

「あれは……そう、ちょうどおまえと同じくらいの年だったか――――」

――タンタンタン。

「あっ、お姉ちゃんだ」

「おいおい、これからって時に……」

お姉ちゃんが階段から下りて来て顔を出す。

「お姉ちゃんおはよー！」

「美紀おはよー」

これもいつも通りだった。

けれどもお姉ちゃんはこっちを見て、足を止める。
あれ？　いつもならそのままお店を出ちゃうのに。

「おはよ颯太。相変わらずあんたはテンション高いわね」
「テンションって何？」

テンションとは元気という意味らしい。（注：誤解）

「テンションテンション！」

僕は今日も元気だよ！　と言いたかった。

「それじゃ、私は行くからね」
「うん、バイバーイ」
「……まさかの痴呆とは。可哀想に」
「聞こえてるわよっ」

最後にお姉ちゃんが兄ちゃんに怒って出ていった。

「お姉ちゃん怒ってたね」
「んなことよりも、さっきの話し続きをしよう――――」

お姉ちゃんが兄ちゃんに話かけるのを、僕はその時初めて見た。

須藤颯太の驚愕（後書き）

『最近お姉ちゃんは良く怒ってるけど、いつもは優しいんだよ』

須藤孝則の困惑（前書き）

客の姿が……。

須藤孝則の困惑

†　Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ｍｙ　ｌｉｆｅ　ｏｆ　ｔｈｅ　ＭＩＮＩ－
ＣＲＯＩＳＳＡＮＴ　†

Ｂｙ　ＴＡＫＡＮＯＲＩ

――チリンチリン。

扉につけられた鈴が鳴るのはお客さん来訪のお報せ。
裏を返せば、お客さんとの送別の合図でもある。
昨日と違い緑のエプロンを羽織った青年の後姿を、私達は温かい目で見送っていた。

「やっぱイカすわー。ミケを拾ったのは正解だったわね」

理沙さんは満足そうに一人頷く。
昨日に続いて、今日も理沙さんの機嫌は良いらしい。

「へぇ、そんなに彼が気に行ったのかい？」
「そりゃあそうよ。これでまたお客さんが増えるわね、きっと」
「しかし……あれで本当に大丈夫だろうか」
「ふふふ。大丈夫、私の目に狂いはないわ」

理由は明白。ミケ君が彼女の趣味に付き合わされているからだ。
まぁ、本人も別に嫌がっているわけではなく、寧ろ進んで協力しているようだが……。

兎に角、理沙さんの命により昨日と同じ格好になったミケ君は、今度は店の制服を着せられて、たった今街中へと放り出された。

「これから忙しくなるわよ〜」
「ははは、それは楽しみだね」

私は今時の流行りは知らないので何ともいえないが……。
理沙さんが言うのならそうなのだろう。

「ねぇあなた、面白いことになってきたと思わない？」

ミケ君を送り出した後。
新しく焼けたパンを並べ終えて。
客足の途絶えた店内でまったりと寛（くつろ）いでいた所だった。

「面白いこと？」
「なによ、気付かなかったの？」

唐突過ぎる。私には何のことだかわからない。

「……はて？」
「昨日のことよ。二人で帰って来たじゃない」
「……ああ」

言われて、そういえばと思い出す。
しかし、あれのどこが面白いのか……。

「美紀が怒ってたことかい？」
「あなたにはそう見えたの？」
「いや、見えるも何も、一方的に怒鳴ってたじゃないか」

昨日の話。
美紀とミケ君が帰ってきた時のことだ。

「美紀はまだ納得してないんだろうね」

傘を忘れたミケ君にも怒っていたが、そうじゃない。
ミケ君が家に居ることを、美紀はまだ反対しているのだろう。

「あら、そうかしら？」

笑みを浮かべながら、理沙さんがそう答えた。

「私はそうは思わないわよ？」

何故か自身満々だ。

「……それじゃあ、美紀はなんで怒ってたんだ？」
「あれはたぶん照れ隠しよ」
「……反抗期じゃなくて？」
「あの子、ミケに惚れちゃったんじゃないかしら」
「……」

理沙さんはさらりと凄いことを言う。

「まさか、それはないだろう」

「そう？　私にはそんな気がするんだけど」

美紀がミケ君に……？

いやいや、そんなはずはない……とも、言い切れない……か？

確かにミケ君は女性受けが良い。

それは店内の様子を見ていればわかる。

ということは、美紀にも同じことが言えるかもしれない……。

「……なんだか私もそんな気がしてきたよ」

「でしょ、面白くなってきたと思わない？」

カラカラ笑う理沙さんを見て思い出す。

そういえば……。

私も出会った当初は、理沙さんによく怒鳴られていた気がする。

それを言えば彼女は否定するだろうが……まさか、そういうことなのかっ！？

須藤孝則の困惑（後書き）

『いやいや、真意はまだわかりません』

須藤理沙の陰謀（前書き）

短い

須藤理沙の陰謀

† This is my lover of the MINI
—CROISSANT †

By RISA

夕方になった。

東の空が紫色に染まり、夜の到来を仄(ほの)めかす。
店先の人通りも落ち着いて、遠くの空では中古品の買い取り演説が披露されている。

……そろそろだろうか。

「キャンキャンキャン」

階上から聞こえてくる甲高い鳴き声が合図だ。

「あ……」

仕切りから顔を出したのは美紀だった。
私の姿を見つけ、キョロキョロと店内を物色する。
その下から見え隠れしているのは、チェリーの尻尾に違いない。

「あら美紀、どうしたのよそんなとこで？」
「なんでもない。それじゃあ行ってくるわ」

「今日は遅くなるの？」
「ん、昨日雨だったし」
――チリンチリン。
チェリーを連れて美紀が出ていく。
「……さてさて」
その姿を見届ける前に、私は工房へと移動した。
「ミケ、来なさい」
「うぃ～、もう少し～」
業務用パックを運びながら呻き声を上げるミケ。
5キロもある粉物物資を5つも重ねて運んでいた。……よし、合格。
「それは後でいいから、早く来なさい」
呼びつけて、事情を説明。
「……えぇぇ」
「寝言はいいから、早く」
「マジッすか」
「マジマジよ」
嫌そうな顔をするミケに道を教える。
「俺はどうなっても知りませんよ？」
「もしもの場合は責任を取りなさい」

「鬼か！」
「えっ？」
「行ってきます！」

……ちっ、身の危険を察知するのが早いな。

「まさか本当にやるとはね……」

ずっと横から様子を窺っていた旦那がそう溢した。

「これくらいで丁度いいのよ」
「……面白がってないかい？」
「あなただって気になるでしょ？」
「それは、まぁ……」

どうやら旦那も興味津々なようだ。

「うふふ、帰ってきた頃が見ものね。それともこっそり跡をつけてみる？」
「理沙さん、それはやめておこう」

須藤理沙の陰謀（後書き）

『ちょっとしたお節介よ』

相坂ミケの悲劇（前書き）

次がラスト！

相坂ミケの悲劇

†　Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ｗｈｏ'ｓ　ｌｅｇｅｎｄ　ｏｆ　ｔｈｅ
ＭＩＮＩ－ＣＲＯＩＳＳＡＮＴ　†

Ｂｙ　ＭＩＫＥ

店を出てすぐ、進路を南にとってひた走る。
少し行った先には、美紀と思われる後ろ姿と、ケツを振って歩くチェリーの勇敢な後ろ姿が映し出されていた。

「……ふぅ」

まったく、理沙さんにも困ったものだ。
どうして俺がこんなことをしなければならんのか。
考えても意味が解からん。全く以て、理解不能である。いや、マジで。（ニヤニヤ）

そう思いながら、速度を緩める。
当然だが美紀はまだ気付いていない。
ワンコも歩くことに集中しているようだ。
俺は足音を潜め近づいて――――脅(おど)かしてやった。

「待てゴラァ！」
「ぎゃぁあああああああ！！？？」

……。

……。

反応が良すぎて、逆に俺の方が困惑する。
付近の皆様は悲鳴を聞いて何事かと思っただろう。
そして振り向いた美紀の顔は、驚愕から憤怒の形相へと変貌を遂げていて……。

「……じょ、冗談な？」
「っ……殺すっ！！！」

俺の必死の弁護は聞き入れてもらえず、次の瞬間、拳と膝が飛んできた。

「……イタタタタ」

顔だけはやめてくれと言ったのに、顔だけ狙ってきやがった。
俳優は顔が命だって言うのに。なんて残酷な女なんだろう。

「ついてくんなっ！」
「俺の意思じゃない」

一通りボコにされた後、俺達は犬の散歩を再開していた。
美紀は足取りが速く、競歩でもしているのかと思うくらいに真剣だ。

「チェリーも大変だな。息乱れてるぞ」
「だから、ついてくんなって！」
「俺が行く先におまえが……まぁまぁ、落ち着け」

いまだに俺への殺意は収まっていなかった。

「さっきも言ったが、これは俺の意思じゃない。理沙さんからの命令だ」
「……なによそれ」
「ボディーガードを頼まれた」
「嘘つけ！」
「他にも店の宣伝やら犬の散歩やら頼まれた」
「……マジ？」
「マジマジマジック……いや、本当だから」

睨むな。

「だから店のエプロン着てるだろ。昼もこれで街中を駆けまわっていたんだぞ？」

あれは大変だった。半分見世物だったからな。
女性に声を掛けられるのは良かったが、チンピラに絡まれたのは予想外。
まぁ、大捜査線の真似事で逃げ切ってやったが……途中、迷子の子供にも出くわしたし。

「駅前で職質にもあった」
「当然ね」
「『失せろ、政府の犬が！』と、言ってやったら４人の警官に取り囲まれてな」

「嘘だろおいっ」
「まさか聞こえるとは思わなかったんだ」
「……あんたバカでしょ」
なんとか平謝りして許してもらった。
拳銃をチラつかせてきた時は、さすがの俺も焦ったぜ。
撃つわけないだろうとも思ったが、本当に発砲しそうな奴が一人混じってたからな。

「という訳だ。俺がおまえを守ってやる」
「何がという訳、よ。帰れ」
「俺がおまえを守ってやる」
「気持ち悪いから帰って！」
「……」

意外とショック……。

「……な、なによ、もしかして凹(へこ)んでんの？」
……でもないか。
「そう思ったのなら、もっと優しくしてくれ」
「帰って寝れば？」
こいつ、性格悪すぎな。
「ところで、この辺には良く来るのか？」
「え？」
気付けば土手に辿り着いていた。

大きな川が広がり、その流れに沿って一本道が続いている。
遠くには橋があって、夕焼けが水面に反射して煌いていた。
まさに、一枚の絵画のような風景がそこには存在している。

「いい景色じゃないか。この街も好きになれそうだ」
「……」

この朱は郷愁を誘う色……どこか物寂しくて、どこか温かい。

「いいね、今度写真に撮ろう」
「……」
「……で、なんだその目は？」

美紀はお化けが見えるらしい。

「あんたがそんなことを言うなんて……」
「言っちゃダメなのか？」
「ちょっと、意外」
「意外でもなんでもないだろ。このセンチメンタルな俺に向かって」

さすがに全米ほどではないが、感動の涙くらい俺も持ち合わせてる。
小説を読んだ時しかり、映画を見た時しかり、足の小指を角にぶつけてしまった時しかり……ほら、こんなにも俺は涙もろい。

「あんたバカだし」
「えれぇよ」
「ふざけてばっかじゃない」
「どっちかっていうと真面目な方？」
「そうゆうトコとか」
「今のは真面目に答えたつもりだっ」

おかしいな？　俺と美紀との間で意思伝達に齟齬が生じているようだ。

「キャンキャン」
「お、おまえもそう思うか？」
「キャンキャンキャン」
「いやいや、それはないだろ」
「キャンキャンキュー」
「あっはは、笑える笑える」
「キモッ」

言われると思ったぜ。

「だってさ、チェリー」
「あんたのことよっ！」
「あんたのことよっ！」
「……」
「……なぁ」
「黙れ」

口真似したら、黙れと言われた。
俺はただどれほどの出来だったか気になっただけなのに。
しかし俺は真面目な人間なので、言われた通りに黙ることにした。

「……」
「……」

喋れないので、景色を楽しみながらてくてく歩く。
橋で折り返して、来た道を逆戻り、すれ違ったランナーを睨みつけ

る。

「……」

「……」

そして黙ったまま店先に到着。

孝則さんと理沙さんの奇妙な視線を受けた俺達は屋上へ。

「……」

チェリーの首輪を犬小屋に括りつけて、美紀はさっと立ち上がった。

「……」

チラッと俺を見てから、無言で踵を返す。

俺はそのまま背中に張り付いて二階へと侵入。

玄関で急に止まった美紀の背中を風の如くに躱し切って。

「……」

俺達はただ無言を貫き徹していた。

「……」

「……」

美紀の部屋の前まで来た時、ピタッとその足が止まる。

「いつまでついてくんのよっ！」

先に限界を迎えたのは美紀だった。

「勝った」
「何が！」

言いつつ、美紀は敗者の顔を晒している。
本当は解かっているはずだ。そう、自分は負けたのだ、と。

「ふっ」
「！？」
「ウップ！？」

鼻で一笑してやった所、鳩尾を強打された。

「〜〜〜〜っ！？」

痛い、息ができない。しかしダメだ……ここで手を出したら、負けるのは俺……っ！

「ふんっ」

――バタン。

苦しむ俺を余所に、扉は堅く閉じられた。

「……」

このまま下へ戻っても良かったが、俺は思いとどまる。
痛む鳩尾を我慢しつつ、俺を拒絶するかのような扉の前で仁王立ちだ。

「ふぅ」

この痛み（恨み）、晴らさでおくべきか。

「美紀ー？」

「……」

返事はないが、声は聞こえているだろう。

「聞こえてるかー、美紀ー」

「……」

部屋の中でガサガサと人の動く音がした。

「ひとつ、言い忘れていたことがある」

「……」

「実はおまえに、ずっと言おうかどうか、迷っていたんだが……」

「……」

音はしない。

「いいか、良く聞けよ？」

「……」

……ゴクリ。

「おまえ、鼻毛出てるぞ」

――ガタガタッ！

反応があった。

くくく、焦ってる焦ってる。

「俺が言いたかったのはそれだけだ」

「……」

「あーすっきりした」

さて、戻るか。

――ギィィィ。

満足した俺が扉に背を向けた時、それは開いた。

「……」

恐る恐る振り返ると――――。

「……」

――――鬼……！

「……気にすんな。俺とおまえの仲じゃないか」

「……」

鬼は無言で重そうな国語辞典を振り被る。

「……ほら、アレ、ほんの軽いジョークだって」

「死ねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！」

そして、それは凶器と化したのだった。

相坂ミケの悲劇（後書き）

『だが悔いはない』

変わってゆく日常で（前書き）

ここまで読んでくれてありがとう！

変わってゆく日常で

その後の話を話そうと思う。

あれから私の日常も少しずつ変わっていった。
言いたいことは沢山あるけれど、まずはお店の話から。

ミケが来てから女性客が急増したらしい。
私は学校に行ってるから実感はないんだけど、本当みたい。
父さんも嬉しそうだったけど、母さんの方が一段と喜んでいた。

でも悪い事もある。
あの雨の日の一件以来、学校に噂が広がった。
ミケのことだ。他人の視線に当てられた私はひどく鬱になる。
さらに、噂を聞きつけたハイエナ共がワラワラと店にまで集まり出した。最悪だ。
何故か知らない連中も話かけてくるし、ミケの話ばっかり聞いてくるし……ムカついたから無視しといた。

ああ、ムカつくと言えばミケのこと。
あいつはバカだ。それだけは絶対に譲れない。
でも、事あるごとに私を苛立たせるあの才能だけは認めよう。

あとすごく頑丈。
殴っても蹴ってもケロッとしている。
そのせいで私はいつも暴力に掻き立てられる。本当はか弱いのに、
不愉快だ……。

家では時々、颯太と一緒にゲームしてる。
大人気ないミケは颯太に勝ちを譲らない。だから私の出番がくる。
ゲームでもボコにしてやって、私はお姉ちゃんの威厳をさらに大きくする。
偶にゲーム以外のこともしてるけど、詳しくは知らない。その時の颯太は嬉しそうだ。

……。

それから、ちょっとした事件もあった。

この前、遙と一緒に帰っていたときに絡まれたのだ。
相手は5人、いわゆるナンパってやつだと思う。人気のない場所を狙われた。

しつこかったので抵抗すると、相手は犯罪を仄めかしてきた。
私は遙を逃がすために、目の前の男の股間を思いっきり蹴り上げた。
けっこーピンチ。遙は逃げられたけど、私はピンチ。
残りの4人が薄気味悪い笑みを浮かべて私を取り囲む。情けないけど、足が震えた。

そんな時、何処からかミケが現れた。
ここからは先は圧巻の一言。未だに信じられない。
震える私の目の前で、ミケが瞬く間にナンパ野郎をのしていったのだ。見直した。
けど、私にふざけた口調を向けてきたから思わず殴ってしまった。
……ありがとうって、言えなかった。

と思ったら、お礼を催促してきた。言い難い。
でもって言えなかった言葉を言うと、むちゃくちゃ驚いていた。勿

論殴っといた。
あと、気を失っていたチンピラの財布からお札と個人情報を抜き取っていた。最低な奴だ。お礼なんて言うんじゃなかった。

とりあえず殴っといた。お金も個人情報も返しといたけど、あれは全然懲りてないな。
私の居ない所でやっていそうなので、注意が必要だ。今後はミケの財布をチェックしておく。

その後、遙とも合流して一緒に帰った。
どうやらミケは宣伝の途中だったらしい。遙がミケを呼んでくれたのだった。
ミケは私を家に送り届けると、次に遙を送っていった。……別に、なんとも思ってない。

そうして私の日常はまた変化した。

ミケがボディーガードと称して、私に張り付いたのだ。
どうやらミケが、父さん達に私が絡まれていたことを話したらしい。親の命令により、ミケが帰宅途中の私のお守りをすることになった。
私も最初は反対したけど、また同じような目に遭うのも避けたい……ので、期間限定で妥協した。

今日もミケと一緒に帰る。
ミケは携帯を持っていないので、私が家に連絡しなければ来ない。
まぁでも、親の決めたことなので、仕方なく３０分前に連絡する。

ミケは校門前の坂を下りた場所で私を待っていた。
最初は尾行するだけだったけど、バカが警察に捕まったからだ。
つくづく警察と相性が悪いらしい。不本意だったが、その時は私も一緒に謝った。

今は髪ボサボサのエプロン姿。
ミケが言うにあれは戦闘モードらしい。

「しかし、美紀よ」

ミケが一度無駄に溜めて、私の名前を呼ぶ。
こいつがそんなことをする場合、続く言葉は十中八九アホなことだ。
聞き流すに限る。

「おまえ友達少ないな」
「うっさい」

話題がシビア過ぎて、つっこんでしまった。

「遙がいるわよ」
「他には？」
「……亜衣とか」
「その意味深な間が気になるな」

亜衣は中学時代の友達だ。仲は良かった。
引っ越してしまったので会っていないが、偶にメールのやりとりはしている。

「あんたはどうなのよ」

他に学校で話すやつもいるが、名を聞かれても面倒だったので矛先を変えた。

「そんなに俺のことを知りたいか？」

いちいち偉そうな態度がむかつく。

「どうせいないんでしょ？」

「友達１００人」

「絶っ対嘘」

「実は５人」

「多すぎ」

「本当は２人だ」

「……へぇ」

意外だ。友と呼べる人間がミケにもいるなんて。

因みに最近気付いたのだが、ミケが『本当は～』と言った場合、それは真実である割合が高い。というか、ほぼ事実だ。

たぶんいつもはふざけているので、自分で線引きしているのだと思う。

気付いた時はちょっと嬉しかった。でも言ったら変えられそうなので、言ってない。

「５人は信じないのに２人は信じるのか？」

「……なんとなくね」

絶対に言わないことにする。

「男？」

「男と女」
「名前は？」
「シゲちゃんとテツ」
「……どっちが女？」
「徹子」
「……」

冗談なのか判別できない。

「まぁ冗談だが」
「どっからよ」
「義経と雪」

義経って……凄い名前ね。

「雪って子が女の子？」
「義経が女ってのもな」

確かに。

「どんな人？」
「義経？」
「雪」
「天才とはそいつのことを言う。俺も偉いがそいつには敵わんな」
「……何歳なの？」
「俺と同い年」
「か、可愛い？」
「興味津々だな」
「ちがっ……わなくもないわね。あんたの友達でしょ？　想像できないもの」

「……褒めてる？」
「褒めてる褒めてる」
嬉しそうな顔すんなっ。貶してんのよ。
「で、どうなのよ？」
「顔か？　顔は……まぁそれなりに、だな」
「具体的には？」
「常に無表情だ。可愛いと言うより怖い。すぐ睨むし……切り裂き魔みたいな奴だな」
「……危ない友達ね」
「俺の唯一の親友だ」
……義経はどこいった？
「じゃあ義経は？」
「あいつは美人だ」
「……美人？」
「ああ、胸も大きいし、腰もくびれてて、ついでに尻もデカイ。あいつが近くにいると本能が理性を奪いかねない。ま、俺の理性なら十分耐えられるけどな」
「待て待て待て待て」
義経って女？　雪も女で……え、意味分からんっ！？
「それって義経のことよね？」
「義経の胸がデカイわけないだろ。怖い事言うなよ」
ならどういう意味よ！？

「義経は切り裂き魔だって言ったろ？　今は雪の話をしてるんじゃないか」
「逆か！」
「騒がしい奴だな」
「あんたが紛らわしいこと言うからよっ」
「足踏むな、地味に痛いし」

痛くしてんのよ。

「で？」
「で、とは？」
「雪は何歳？」
「美紀と同じ」
「……本当に友達？」
「義経の妹だ。小学校の頃から知ってる」
「まさか、あんたの……？」
「言っておくが、俺は義経をお兄さんと言うつもりはないぞ？　まぁ雪は俺にとっても妹みたいなもんだが」

……ふーん。妹ね。

ふと思った。

「ねぇ、あんた兄弟いるの？」
「ん……一応、いる」

声のトーンが2段階くらい下がった。

「……何人？」

聞こうか迷ったけど、知りたかった。

「二人」
「妹はいるの？」
「兄と妹」
「何歳？」
「２２と１５」

話す度に不機嫌になっていくミケ。
それは、私の知らない横顔で。

「そう」

私はそれ以上聞けなかった。

「……」
「……」

沈黙が訪れる。

たぶんそれは、私とミケが近づき過ぎたから。
思わず踏み出した一歩が、思わぬ場所に降り立ってしまった――――。

――――ミケの兄妹。

それがミケが家出した理由に繋がっている。

……きっと、そうだ。

「……」
「……」
私は感じ取っていた。
何かが変わっていく予感。
ミケと出会い、私の日常は加速してゆく。

これから、様々なことが私を待ち受けている――――。

遙がミケに告白すると言い出して、私がミケに伝えることになったり。

街のチンピラ達の抗争に巻き込まれ、家にも迷惑を掛けてしまったり。

そのせいでミケが出て行こうとして、何故か私がそれを止めることも。

ミケの親友の義経さんと雪にも会って、私達はその二人に助けられる。

やっと抗争が終わったと思えば、今度は雪が居候するとか言い出して。

色々あって雪と協定を結んだ後は、突然家にミケの妹が訪ねてきたり。

妹からミケが家出した理由を教えてもらうと、またミケが姿を消し

て。

何故か私は泣いて、なんでか一人でミケを捜しに行って……見つけて。

ミケを連れ戻してからも、沢山沢山、色んなことがあるんだけれども。

――――今はまだ、何も知らない。

ただ、予感だけが私の胸を取り巻いている。
希望に満ちて、私はそれを待ち望んでいた。
私の中で、ミケの存在が大きくなっていく。……そんな、小さな予感。

「ミケ」
「え……？」

新しく始まった日常を、私は小さな期待を抱いて駆け抜けていく。

「ミケ」
「なに」

今、その一歩を踏み出した。

「ミケって変な名前ね♪」
「うっせ」

変わってゆく日常で（後書き）

『笑って、踏み出した』

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8727k/

ミニクロワッサン。

2010年10月10日06時52分発行